

万有引力(谷川俊太郎:詩集『虚空』によせて) 2022/4/13

ニュートンは言うまでもなく古典力学を確立し、身近な現象を過不足なく記述した正に知の巨人である。林檎の落ちるのを見て万有引力を構想したという逸話は余りにも有名だ。その引力は重力定数と二つの物体の質量を乗じたものを物体の距離の二乗で除したものだ。

高校時代、なるほど科学者は斯く自然を数式として記述するのだと学習していく時、偶々谷川俊太郎の詩集『20億光年の孤独』を手にし、その中の言葉に驚愕した。「万有引力とは引き合う孤独の力である」と。ああ詩人とは斯く世界を”意味”として表現するのだと。喜怒哀楽や花鳥風月を単に意匠を凝らして記述するのではないのだと。

その谷川が最近詩集を出版した。若き日の彼の言葉が何かしら青い空に吸い込まれていく様だったように、この詩集で言葉は確実な”意味”を目指しながらも否応なく虚空に吸い込まれていく。しかしここに若き日の詩人はいない。死への雰囲気。嗚呼、詩人老いたり。